近世の観光に影響を与えた貝原益軒の紀行文の特徴

On the Written Records of Ekiken KAIBARA'S Travels and Their Effect on Tourism in the Edo Period

溝口周道*

Kanemichi MIZOGUCHI

摘要：貝原益軒（1630－1714）は、公務の旅の傍らに各地を遊観し、その足跡を紀行文に記した。そのうちの数点が板行され、旅に携行されたり多くの紀行文や名所図会等に引用され、近世の観光に少なからぬ影響を与えた。本研究は、そのような意義を持つ貝原益軒の紀行文の特徴について、読者である観光者のまなざしの観点から考察したものである。その結果、名所等だけではなく路次の風景・事物に興味を広げたことで、旅の行程における情報の密度を高め、旅全体の魅力を表現し伝えるものとなったこと、訪問地の見所となるポイントなど、旅における様々な楽しみ方を具体的に伝えていることなどを明らかにし、それらが読者の関心と呼んだことを示した。

はじめに

貝原益軒（1630－1714、本名篤信）は、筑前黒田藩に仕えていた学者であったが、彼はまた生来の旅好きであった。このことは益軒の作品、例えば『壬申紀行』に「わかき時より年毎に旅の空にうかれ出て東往西還の客となりてやむことなき・・・。」¹⁾ というように記されていることや、人生の楽しみを説いた『楽訓』に「旅」²⁾ が取り上げられていることなどから知ることができる。

益軒は、公務で江戸や京を往復する傍らに、足を延ばしたり回り道をするなどして各地をめぐり³⁾、その旅の記録を多くの紀行文として残した（表－1）。紀行文に記された旅は、『豊国紀行』に「予諸国を多く遊観せしが、」⁴⁾、『諸州めぐり』に「かねてより丹後若狭近江に遊観の志あり。」⁵⁾ などと記されているように「遊観」すなわち「観光」の旅であった。

1. 研究の位置づけと目的

(1) 近世の観光における益軒の紀行文の意義

わが国におけるジャーナリズムの成立は元禄から享保期で⁶⁾、益軒の紀行文（以下「益軒紀行」と略記する）は、京都の書肆柳枝軒こと茨木屋多左衛門によって数点の紀行として編集され、正徳3年（1713）に板行されて以来、幕末に至るまで板を重ね、近世を通じて広く読まれることとなった。

それらが実際に読まれ使われた様子は、次のようなことから知

ることができる。安田相郎の『大和巡日記』は『和州巡覧記』を手にしての旅で、その中に「手引曰、・・・たまたま関東よりは貝原記など所持して来る人、西国にて貴君計くはしく御尋の方は、初て手引よし申す。」⁷⁾ とあるように、関東から益軒の書を持って旅してくるものがいたことが記されている。また、秋里籬島の『木曾路名所図会⁸⁾』や大田南畝の『壬戌紀行⁹⁾』に『木曾路之記』からの引用が記されているほか、多数の書に引用されている。板坂¹⁰⁾によると俳人関係の作品への引用を除けば、ほぼ同じ時期の松尾芭蕉の紀行文よりも引用は多出している。

益軒紀行は、板行され、多くの人に読まれ、旅行に携行され、紀行文や名所図会などの多数の書に引用された。その意味で、益軒紀行は近世の観光に少なからぬ影響を与えたといえる。

(2) 研究の目的

これまでに益軒紀行については紀行文学史的な観点から総論的にいくつかの特徴が指摘されている。柳田¹¹⁾は、益軒紀行が詩歌美文の排列を専らとした従前の紀行文とは異なり、記述を専らとした風土観察の書であるとし、従来の旅人の関心は都登りと江戸見物であったが、益軒紀行では、次第に道途田園の事物に向けられていることを述べている。板坂¹⁰⁾¹²⁾は、同様の点を指摘するとともに、益軒は「旅を、古典紀行の体験を再現することではなく、未知の事物を見聞することを主とした完全な娯楽としてとらえ、紀行文は、その楽しみを記録し伝達するものと考えた。」として

表－1 貝原益軒の主な紀行文

書名	成稿[刊行]年	主な遊観地	備考
杖植紀行	延宝七年(1679)	杖植温泉、英彦山	
東路記	貞享二年(1685)	次の三書の地の他、厳島、敦賀、播州	
木曾路之記	正徳三年(1713)	中山道	刊本
日光名勝記	正徳四年(1714)	日光、上州倉賀野、足利	刊本
吾妻路之記	享保六年(1721)	東海道	刊本
己巳紀行	元禄二年(1689)	次の二書の地より敦賀、播州を除く	
諸州めぐり	正徳三年(1713)	丹波、丹後、若狭、山城、河内、和泉、紀伊、大和	刊本、西北紀行、南遊紀行
統諸州めぐり	正徳三年(1713)	美濃、敦賀、摂津、播州	刊本
壬申紀行	元禄五年(1692)	書写山、奈良、伊勢、東海道、身延山、江ノ島、鎌倉	
豊国紀行	元禄七年(1694)	豊後別府、中津、宇佐神宮	
和州巡覧記	元禄九年(1696)	京、奈良、吉野	刊本、別名大和廻[巡覧記]
京城勝覧	正徳元年(1711)	京	刊本
有馬山温泉記	正徳元年(1711)	有馬温泉	刊本

注) 『益軒全集巻一・巻七』（益軒会、1911）及び『貝原益軒略年譜』（板坂、1991）より作成。成稿[刊行]年は正確に判明していないものもある。『吾妻路記』、『木曾路記』、『日光名勝記』は『東路記』からの編本、『諸州めぐり』、『統諸州めぐり』は『己巳紀行』からの編本、『統諸州めぐり』には一部『東路記』からの編集を含む

*旅と観光研究室

いる。それゆえ彼の紀行文には、読む人のために実用性を重視し平易な和文で書かれていること、異境や異国を別の文化圏としてとらえていること、記されている内容は地誌的、客観的であることなどの特長があることを指摘している。そして、益軒が旅を楽しむ、従来の紀行文が持たなかった要素、つまり、旅での体験、見聞した事実をありのままにつづることが読者を引きつけた要因となっていることを指摘している。

以上の指摘は、益軒紀行が広く読まれたことの理由の一つの側面を示している。すなわち、旅を好み楽しんだ益軒が、旅先でどのような観光対象に興味を持ちまなざしを向けたか、旅での体験、見聞を、どのような姿勢、観点で記述したか、という点を主に考察して示したものである。しかしながら、広く読まれた理由にはもう一つの側面がある。それは読み手である観光者のまなざしの観点によるものである。旅に誘われるような魅力や、実際に旅に出て観光をする際に役に立つもの、つまり観光の対象の選択や見方、体験の指針となるものが、紀行文中に具体的にどのように表現されているかという点である。この点についてはこれまでほとんど言及されていない。

そこで、本研究は、近世の観光に影響を与えた貝原益軒の紀行文について、読者である観光者のまなざしの観点からその特徴を考察することを目的とする。具体的には、紀行文中の記述に特徴が見られる部分を抽出し、それらが観光者のどのような興味、関心を喚起する効果を持つのかについて考察することとする。

なお、使用する資料は刊行された紀行文を主とするが、必要に応じて刊行されなかった紀行文も参考に使用する。

2. 紀行文全体を通じた記述上の特徴

(1) 情報に対する信頼感

益軒紀行を一読してすぐにわかることは日本紀を始めとして多数の文献を踏まえて記述していることである。この点だけからも読者は益軒紀行が信頼できる書物であろうという印象を持つと思われる。さらに詳しく見ると、「慥（たしか）なる書に見えざれば、二つながら信じがたし。」¹³⁾ という表現からわかるように、文献を確かな書物とそうでないものに分けていること、さらに、「名所の事、古人の説也とて、ことごとくは信ずべからず。あやまれる説多し・彼は考合せて決定すべし。」¹⁴⁾ というように科学者の視点、姿勢で俗説や古典等の情報に接していることなどがわかる。これらのことから益軒紀行に記載されている情報に対して読者が信頼感を持ち、役に立ちそうな書というイメージを抱かせる効果をもたらしていると考えられる。

(2) 旅のイメージの喚起

江戸時代初期の林羅山による『丙辰紀行』15) は、路次の訪れた土地について、作者の個人的な感懐を抑え観察や資料にもとづいた地誌的、客観的な記述が認められる早い例であり、益軒紀行と共通する面を有している。両者を比較してみると、『丙辰紀行』は江戸から京までの道筋を武蔵野から大津まで55箇所の土地の名を項目として上げて記述している。他方、ほぼ同じルートの『吾妻路之記』は京から江戸日本橋に至る行程で、改段ごとに出てくる地名は『丙辰紀行』の項目数と同じ55箇所であるが、その他に区切りをつけて出てくる（○印がついた）地名を含めると516箇所が登場している。前者が旅中に訪れた土地を断片的に取り上げているのに対し、後者は旅の行程にある土地をほぼ連続的に取り上げている。

次に、益軒紀行に記載された土地に関する記述量を『諸州めぐり南遊紀行』⁵⁾ を例として見てみる。厳密には一つの地名（地区）に対し一つの段落とは言い切れないが、概ね一箇所あたり一段落とみなし段落ごとの行数を数えることとする。1行は23字前後で、それに満たない最終行も1行に数える。

『南遊紀行』には187の主な地名（段落）があり、そのうち3行以下が101箇所（54%）で半数を越え、4～6行が39箇所（21%）で6行以下のものが全体の4分の3を占めている。7～9行は14箇所（7%）、10行以上が33箇所（18%）となっている。行数が少ない箇所は、地名だけ、ないしはそれに道筋、里程、「○○あり」というような事物の存在の記述とそれについての簡単な説明などが加わった程度の内容であるが、行数が多い箇所では興味ある風景やその土地に関わる事柄の詳しい記述が見られる。この紀行のクライマックスである吉野山は56行、和歌浦は30行（前後の和歌山、玉津嶋等を加えると71行）に及んでいる（表-2）。

このように地名をたどることで連続性を表現する一方で、興味ある土地や事物については詳しく記述してメリハリのきいた表現とすることにより、読者に具体的な旅をイメージさせ、旅における抑揚感を伝える効果をもたらしていると考えられる。

また、10行以上の記述がある33箇所のうち、名所・旧跡・歌枕、宿駅等のいわゆる著名な場所以外の箇所は6箇所あり、他方、著名な場所の中で、名所・旧跡・歌枕、宿駅等に関する直接的な説明以外の記述、例えば近辺の集落の様子や里人との話、名物や名産等に言及しているものが11箇所ある（表-2）。興味の対象が名所等の著名な場所・事物だけではなく、路次の土地の風景、事物に及ぶことにより、旅の行程を記す情報の密度を高め、旅全体に対する興味を深める効果をもたらしていると考えられる。

3. 観光の対象のとりえ方の特徴

次に、益軒が旅の途次興味を持って観たり楽しんだりした対象、すなわち観光の対象をどのように記述しているか、また、そこには観光者の関心を引くどのような特長があるかを考察する。ここでは『諸州めぐり南遊紀行』に10行以上の記述があるものを興味をもったものの代表例とみなし、それについての記述を手がかりとするとともに、必要に応じて他の紀行等の記述を補いながら検討することとする。

訪れた場所についての「○○がある」という記述や由緒・来歴の記述などの一般的な説明以外のもの、つまり何か特徴がある記述を抽出したのが表-2である。それらの中の主な特徴を、名所・旧跡等とそうでないもの、つまり路次の風景・事物に分けて整理・考察する。

(1) 名所・旧跡等

(i) 見所となるポイントの具体的な提示

表-2の中には、○○からの眺めがよいというような記述が12箇所、神社仏閣等の建物や庭園等が美しいという記述が8箇所あり、訪れた場所の見所となるポイントを具体的に提示している。これらは観光をする者に有用な情報となるとともに、訪問地でそのポイントへ行くという具体的な行動をイメージさせる効果がある。また、南遊紀行が春の旅であったため花の美しさが随所に描かれ、それぞれの場所の魅力を高めている。このことも旅する季節の選択という意味で同様の効果をもたらすものと考えられる。

(ii) 対象の傑出した魅力・価値の評価

益軒は、表-2に見られるように、紀三井寺のように優れた景観を有するところは国内では稀であると、また、吉野山の桜のように美しい花が非常にたくさんあるところは中国にもないであろうと評している。あるいは、「（石清水八幡）神殿いかめしく美麗なり。日本にて四番の宮なり。第一、日光東照宮。第二、駿府浅間。第三、和州多武峯。」（『京城勝覧』¹⁶⁾）というように順位付けしているものもある。また、普見山を「すぐれたる霊地」としているが、霊地の評価は優れた霊地かそうでないかに分けられている¹⁷⁾。

このように益軒は傑出した魅力や価値を有する観光の対象を順位付け等の比較評価によって記している。このことは対象への関

表－２ 『諸州めぐり南遊紀行』の中で記述量が多い場所とそこでの特徴ある記述

場所・地名	特 徴 が あ る 記 述
獅子窟・普見山 (p104, 15)	・「其境すぐれたる霊地也」・佛堂「美麗也」・「糸桜多し。今日幸にして花盛也」・山上からの眺望「最佳観也」
天川 (p105, 11)	・川の流路、形状「天上の銀河の形の如し」・「諸国の川を見しに、かくのごとく白沙のひろく直にして、数里長くつゞきたるはいまだ見ず。」
田原 (p105, 11)	・谷の形状「恰陶淵明が桃花源記にかけるがごとし。」
ふかうの池 (p106, 13)	・「漁家七十八戸あり」・池の魚の種類、植生・生活、生業の風景(漁舟、菱の採取[食用、販売])
跡部村・勝軍寺 (p108, 12)	特になし
葛井寺 (p109, 20)	・御陵の埋葬者の考証(日本紀、延喜式の説、里人の説)
狭山新町 (p110, 11)	・狭山が池の名の考証・煙草の栽培(嫌地)
天野山金剛寺 (p110, 29)	・僧坊に宿泊、寺僧の話・山からの寺の俯瞰「佳景也」・寺産(田の耕作、旅客の宿泊、松茸、天野酒[名産])
久米寺 (p111, 14)	・里人の話
佐野市場「和泉国」 (p112, 15)	・「民家千家あり」「民家皆瓦葺」「宅せばく町をなさず」・「富商多し」「商人多く船を持」・優れた田園の風景「土地肥饒にして、農人等耕作に力を用ひ、五穀菜蔬をうるに精し」「田園の内塵芥なく、畦をなすに、工匠のすみ縄を引たるが如し」「凡田園に功を用て精しき事、五畿内は他州にすぐれ、大和河内は尤もすぐれたり。和泉は猶それにまさるべし」
加多淡島 (p114, 24)	・「民家千軒有と云。富人多し」・賀田淡島「此地佳景なり」・船の往来・宿泊、旅舎からの眺め「風景よし」・「かだめとて、わかめの名物あり」
和歌山 (p115, 12)	・「城下の境地ひろく、ゆたけし」・台徳院の御廟「甚美麗にして大なり」
和歌浦 (p116, 30)	・東照宮「宮作大にして甚美麗なり」・東照宮から和歌浦の眺望「其景すぐれたり」・「桜さかりにさきて、光景もいとまされり」・東雲海院の仮山水「甚佳景なり」・「かたをなみ」の考証(俗説、万葉集)
玉津嶋の社 (p116, 19)	・社の前後の石山「甚奇しき観なり」・「凡和歌の浦の石は皆木理有て甚美なり。他州にてはいまだ見ざる所也」
紀三井寺 (p117, 10)	・「入江のあたり佳景なり」・古歌「人とはぐ……」
藤代嶺 (p118, 12)	・堂前からの眺望「眼界ひろければ、かしこ爰見所多し」「諸国の佳境多しといへども、かくのごとくなる美景はまれ也」
根来寺 (p119, 28)	・「藤代の坂半より、海浜目下に有て、絶景なり」・「木碗を多く製す。紀州碗と云是也」
瀬山 (p120, 20)	・「寺僧材木薪等を伐て和歌山に売、或は耕作して寺産とす」・「此所はかねてより我かくのごとくならんと思ひしにたがわず」
御廟の橋 (p123, 10)	・「古歌多し」・「河中にかゝる嶋めづらし」「美景也」「桜も所々さかりにみゆ」・妹背山が紀州にあるとする説の考証(「見ざる所をよみし歌」の誤り)
高野 (p123, 10)	・俗説の否定
高野山中 (p124, 11)	・「かねては山中寂寞、冷淡の地ならんとおもひしに、左はなくて、繁栄富饒なる熱鬧の地なり」
吉野山 (p125, 56)	・物資の運送・厠(河屋)・「彼僧を郷導として」・「不動坂にかうの瀑有。佳景なり」
葛城・金剛山 (p127, 26)	・花景色の詳述・「吉野山のことは大和巡覧記にくはしく記し足ればこゝにすさず」・「もろこしには「かゝるうるはしき花多き所ありとも見えず」
千早城址 (p129, 22)	・僧坊「皆家作美大也」・嶺からの俯瞰「雲はるれば佳景也」
観心寺 (p130, 14)	・楠正成
下赤坂・赤坂城 (p130, 10)	・「寺の辺に民家おほし」・「本堂美麗也」・楠正成
水分村・大明神 (p131, 13)	・楠正成
上太子・御墓山 (p132, 11)	・「楠正成は、古今に類少き忠義の人にて、智略ありし良将なれば、人のあがめまつる事宜なり」
誉田・八幡宮 (p132, 11)	・「折ふし、桜盛也」
道明寺 (p133, 10)	・祭「能と作山隔年に有」
大和川 (p133, 14)	・「楠當寺の名産也」
枚方 (p135, 10)	・川の流路と橋「國府の下は、川はゞひろき故橋長し。橋のはゞ一尺餘、長さ三町ばかり。水あさしといへども、危してわたりにくし」・大阪からの船による物資の輸送・ほしか(干鰯)「田園の肥」の輸送
都近辺 (p136, 50)	・世俗の「枚方」の字の誤り
石清水八幡	・八幡山「眺望の景甚よし」・「宮殿門閤の尤美」・「四方の國にも、美大なる神廟所々にありといへども、其境地これに及ばず」
伏見	・桃の花「かくのごとく花多き所、凡日本の本の内にはなしと云」
東山	・東山の花「流石都の花なれば、名にめでで、見るごとくにめづらし」

注：場所・地名は記載順。()内は『益軒全集巻七』の掲載頁と行数。下線[実線]は名所・旧跡等の著名な場所以外のもの、下線[破線]は名所・旧跡等の場所、その場所についての直接的な説明以外の記述があるもの

心、印象を高めるとともに、そこを訪れる動機を高める効果をもたらすものと考えられる。

(iii)興味の視点の拡大

益軒は、葛井寺で御陵の埋葬者を日本紀等の文献にもとづいて考証し、和歌浦で「かたをなみ」について万葉集の歌を踏まえて考証し、根来寺や高野山では、書物等から得た情報にもとづいて事前に想像していた様子と、実際に見た印象とを比較して感想を述べている。あるいは、天野山金剛寺では寺産について言及し、楠正成ゆかりの名所では「古今に類少き忠義の人……」とある種の称賛を伴って見ている¹⁸⁾。これらからは、名所・旧跡等の従前の楽しみ方を越え、文献等の情報に基づいて想像を楽しんだり、名所を取り巻く環境に興味を馳せたり、個人の思い入れを付加して見たりと、興味の視点を拡大させて楽しんでいる様子がうかがえる。このように、名所を見る際の従前とは異なる様々な見方が具体的に示されていることが、旅の楽しみを広げるものとして読者の興味を引く一因となっていると推察される。

(2) 路次の風景・事物

(i)路次の町や村の風景へのまなざし

表－２にある「漁家七十八戸あり」「民家千軒有と云。富人多し」「民家皆瓦葺」「宅せばく町をなさず」などの表現は、紀行

文に描かれた旅の途次にある町や村の雰囲気伝える役割を果たし、旅の行程を、単なる地名の連なりではなく、変化する風景の想像を伴って認識させ、実際の旅のイメージに近づける効果をもたらしている。また、同時に、集落の規模や形状を見たり、叢の並を見たり、富裕の様を見たりと、路次の町や村の風景に面白さを見出す具体的なまなざしを提示していることが、観光者にとって実用性のある情報となっている。

(ii)地域固有の風景へのまなざし

表－２の中には、他国には見られない和泉の国の優れた田園風景や、大和川の舟運・ほしか(干鰯)の輸送、各地の名産・名物など、地域に固有な生活・生業の風景が描かれている。また、『日光名勝記』には北国の桃李の花の色が西国のものとは異なりきれいであること¹⁹⁾が、『木曾路之記』には、北寄りの地のため気候が遅く、春の末でも桃李の花などが盛りで美しく、見所が多いことが記されている²⁰⁾。

これらは名所の風景の記述と遜色なく描かれており、地域に固有な風景、地域らしい風景を観光のまなざしの対象としたり、あるいは新たな見所として発掘したりすることに、新たな旅の楽しみ方として興味を感じさせる効果をもたらしていると考えられる。

(iii)里人との対話・ふれあい

葛井寺や久米寺では里人の話を聞き、金剛寺では寺僧の話を聞き、高野山中では寺僧の案内を受けている。益軒は西北紀行の旅で、小浜に宿り「あるじをよんで此里の事とふ。凡異境にゆきて、其里の物語をきくこそ、心なぐさむるわざなれ。博物のたすけ共成り。」²¹⁾と記しているが、里人との対話は、その土地のことを知る情報源になるだけではなく、旅の楽しみの一つとなることが示されている。

このように、旅の楽しみは風景を見ることだけではなく、里人との対話・ふれあいというような体験の中にも見出すことができるという視点も、読者に興味を感じさせる一因となっているものと推察される。

4. まとめ

以上の読者である観光者のまなざしの観点からみた益軒紀行の特徴を整理すると次のようになる。

- ①益軒が、一読してわかるように多数の文献を踏まえて紀行文を記していること、さらに科学者の視点から訪れた土地に関する俗説等を客観的に考証していることなどから、益軒紀行に記された情報が、読者である観光者にとって信頼できる情報として認識された。
- ②益軒紀行は、名所・旧跡等を断片的に取り上げるだけではなく、旅の途次の地域も取り上げることで、一続きの旅の行程を表現するとともに、名所・旧跡等の特定のスポットの魅力だけではなく、旅の行程全体における情報の密度を高めている。その一方で、興味ある土地や事物については詳細に記述してメリハリのある表現としている。それらにより、読者に具体的な旅の行程や、旅における抑揚感をイメージさせ、旅全体の楽しみを伝える効果をもたらしている。
- ③名所・旧跡等では、眺めが優れた場所や美しい建造物など、見

所となるポイントを具体的に提示することで、読者に有用な情報を提供し、訪れる場所の選択や、そこでの具体的な行動をイメージさせる効果をもたらしている。そして、観光の対象が有する傑出した魅力や価値については、その評価を記すことで魅力をより印象づけている。また、書物等から得られる情報に基づき名所について様々な想像を行うことや、名所を取り巻く環境に興味を馳せることなど、興味の視点を拡大し、名所の新たな見方を提示して、興味を抱かせている。

- ④路次の風景・事物については、まず、旅の途次通りかかる町や村の風景を想像させる記述が加わったことで、紀行文に描かれた旅を実際の旅のイメージに近づける効果がもたらされるとともに、集落の規模や葺の並、富裕の様など、面白さを感じさせる具体的なまなざしの対象を提示したことで、観光者にとって実用性のある情報となっている。そして、路次の地域に固有な生活・生業の風景を、名所と変わらないように描写することで、観光のまなざしの対象として認識させたり、新たな見所として発掘する楽しみを観光者に抱かせる効果をもたらした。また、旅の楽しみが、風景を見るだけではなく、旅先における里人との対話やふれあいというような体験の中にも見出すことができる点を示したことが、読者に興味を感じさせる一因になっていると考えられる。

益軒は、旅は楽しむものとしてとらえ²⁾、紀行文は、その楽しみを伝え、これから旅をする人に役立つものとして記述しようとした。以上に整理した特徴は、益軒紀行が旅をするものの魅力を読者に感じさせ、旅における様々な楽しみ方を具体的に伝えることで観光者に実用性のあるものとなっていることを示しており、その意味で、益軒紀行は、益軒の旅に対する考え方と紀行文執筆の目的にかなったものになっているといえる。

引用・参考文献及び補注

1) 板坂耀子校注 (1991): 叢書江戸文庫 17 近世紀行集成, p6: 国書刊行会; 『壬申紀行』はpp.5-48	『諸州めぐり南遊紀行』pp.102-137, 『続諸州めぐり』pp.138-153, 『吾妻路之記』pp.154-213, 『日光名勝記』pp.213-225, 『木曾路之記』pp.226-267, 『有馬山温泉記』pp.268-309, 『扶桑記勝』pp.310-542が収録されている。	岩波書店
2) 益軒会編 (1911): 益軒全集巻三, pp.605-640: 益軒全集刊行部: 旅行に関する記述はp616	6) 前掲書3), p129	13) 前掲書5), p247
3) 井上忠 (1963): 貝原益軒, p106: 吉川弘文館; 井上によると、益軒は「参観奉行としてまた藩命により江戸へ十二度、京都へ二十四度、長崎へ五度行った」とされている。	7) 前掲書4), p442	14) 前掲書5), p147
4) 宮本常一他編 (1969): 日本庶民生活資料集成第二巻, p483: 三一書房; 『豊国紀行』はpp.477-499	8) 林英夫編 (1981): 日本名所風俗図会 17, p422: 角川書店	15) 岸上質軒校訂 (1900): 続帝国文庫第二十四編 続紀行文集, pp.279-305: 博文館
5) 益軒会編 (1911): 益軒全集巻七, p82: 益軒全集刊行部; 本書には『京城勝覧』pp.1-44, 『和州巡覧記』pp.45-81, 『諸州めぐり西北紀行』pp.82-101,	9) 浜田義一郎他編 (1986): 大田南畝全集第八巻, p292: 岩波書店	16) 前掲書5), p28
	10) 板坂耀子 (1993): 江戸の旅と文学, p126: ぺりかん社	17) 例えば『壬申紀行』の中では、書写山を優れた霊境とし、高野山は熱鬧の地ということで優れた霊地とはしていない。: 前掲書1), p9
	11) 柳田国男 (1930): 帝国文庫第二十二篇 紀行文集 解題: 博文館	18) 益軒は幼少より太平記を愛読していた。: 板坂耀子・宗政五十緒校注 (1991): 新日本古典文学大系大系98 東路記 己巳紀行 西遊記, p156: 岩波書店
	12) 板坂耀子 (1991): 貝原益軒『東路記』『己巳紀行』と江戸前期の紀行文学: 新日本古典文学大系大系98, 417-433: 新日本古典文学大系大系98, 417-433: 岩波書店	19) 前掲書5), p215
		20) 前掲書5), p229
		21) 前掲書5), p94

Summary : KAIBARA Ekiken (1630-1714) had made many travels for pleasure and had recorded them in many accounts and they had effected on the tourism in the Edo period. So they are analyzed from the point of tourist gaze to clarify the characteristics of the described Ekiken's ways of sightseeing that attracted the readers. It is revealed that Ekiken was interested in the regions on the way of his travel in addition to the famous tourist sights and described a series of the places on the way of his travel to express the pleasure of the whole travel, and that he showed the new points of viewing on the famous tourist sights and the unique regional landscapes, and enjoying hearing the history and the tales from the people of the visited place.